

「麻生鉱業吉隈炭鉱の遺骨」について

アンダーウッド ウィリアム

少々不思議なことだが、2006年2月に外務省(大臣は麻生太郎)は、麻生グループ(社長は麻生太郎の弟)から1984～85年福岡の会社が6体の朝鮮人遺骨を、今でも麻生吉隈炭鉱の近くに住む家族に返還したという通知を受けたという。1960年代の再開発の際、閉鎖されて間もない吉隈炭鉱の坑口付近の無縁墓地で推定504体の遺骨が発見された。麻生鉱業はすぐに無縁墓地から数百メートルの位置に納骨堂を建て、遺骨を移した。納骨堂を建てる前に、無縁墓地の一部に公民館を建てようとして整地した際にも遺骨が数体でてきた。

福岡県の特高資料では、麻生鉱業は1944年1月時点で7,996名の朝鮮人労働者を雇用しており、56名が死亡し、61.5%が脱走したとされ、労働と生活状態の悲惨さが推測される。麻生鉱業は最盛期には九州で合計7つの炭鉱を経営し、戦争後期に入ると南太平洋のセレベス島でも小規模な炭鉱を経営した。吉隈ほど大規模な墓は例外としても、墓標もない小さな墓は、戦後筑豊地域の鉱業が衰退するにつれ、あちこちで発見されている。九州で鉱山を運営していた企業は、強制連行が行われた当初は遺骨を韓国へ返還していたが、終戦が近づくと米軍の潜水艦の周辺海域での攻撃が始まり、関釜連絡線の運行が難しくなり、遺骨の返還は難しくなった。

1970年代初頭、朝鮮人強制連行真相調査団の在日朝鮮人と日弁連の弁護士たちが筑豊地域での朝鮮人強制連行の調査を始めた。この初期段階のこの活動には林えいだいも参加していた。林は筑豊出身の歴史研究家であり、強制連行や戦時中の日本の行為について過去40年にわたり50冊あまりの本を執筆している。1975年、林は麻生が建てた納骨堂を訪ね、朝鮮名の書かれた6つの骨壺を写真に収めた。この納骨堂のその他の骨壺は、日本人名や無名のものであった。林は翌1976年、この納骨堂を再び訪れ、テレビのドキュメンタリー番組用に情報を集めた。しかし、この時には朝鮮人の名前が書かれた骨壺は6つとも柵から姿を消していた。地下につづく小さな穴があり、朝鮮人遺骨はその地に納めたと言われた。奇妙な葬り方であるが、それ以上の説明はなかった。当時、麻生太郎は麻生グループの社長であり、会社は大規模のセメント会社を中心とする企業体に姿をかえていた。麻生は1979年、国会議員選挙に当選して社長を辞職している。

麻生吉隈の納骨堂の柵から朝鮮人労働者の遺骨が撤去されたのは、麻生グループの御曹司が政治家として活躍する上で責任を問われる可能性があるともみなされたからかもしれない。今日、林と真相究明ネット福岡支部の調査者たちは、麻生グループが外務省に提出した報告書の信憑性に疑いを持っており、6体の朝鮮人遺骨は麻生の納骨堂の地下に個別性が分からないままの状態に入っているのではないかと考えている。林によると、1980年代には、筑豊在住の朝鮮人の家族は全国に分散していたので、筑豊地区には残っていないはずである。だとすれば、どのような新情報を得て遺族に引き渡したのだろうか。終戦後40年、吉隈の地中で発見されて20年、そして初めて調査が入った後、納骨堂の柵から撤去されて10年経っているのである。